

ガチムチ配達員は星ひとつの
クレームで配達先の部屋に閉
じ込められ謝罪しながら犯さ
れ続ける

R18

2026・10・1

目次

第01話「星ひとつ、部屋の鍵」

第02話「謝罪動画、一枚目」

第01話 「星ひとつ、部屋の鍵」

「また神代かよ……！」

柏木剛は赤信号の手前でブレーキを握り、スマホの画面に吐き捨てた。

背中の保温バッグが、止まった勢いで肩を後ろへ引く。

配達アプリの到着予定は、もうすぐ赤に変わる。

届け先は港区の高層マンション、四十五階の4502。

配達履歴は、この一か月ほとんど神代修一の名前で埋まっている。

配達代行「フードライダー」港南営業所の配達員になって、もう五年目だ。

昼も夜も自転車で坂を登る毎日で、太腿は配達用の黒い短パンをぱんぱんに押し上げていた。

信号が青に変わる。

柏木は立ち漕ぎで交差点を抜けた。

「毎回毎回、箸の向きだの袋の結び目だの……細けえんだよ、あの客」

口は悪い。

それでも、届け物だけは落としたことがない。

神代は営業所と法人契約を結んでいる大口の客で、会社の昼の弁当も、夜の個人の注文も、全部うちに回してくる。

怒らせたら、柏木の担当どころか営業所の売上ごと消える。

エントランスで暗証番号を押し、宅配用のエレベーターに乗り込んだ。

鏡に映った短髪の頭から、汗がこめかみを伝う。

紺の配達ポロシャツは背中まで濡れて、胸板に貼りついていていた。

首から下げた名札が、息をするたびに胸の上で跳ねる。

四十五階の廊下は静かで、分厚いカーペットがスニーカーの音を吸った。

4502のチャイムを押す。

アプリの表示が、その瞬間に赤へ変わった。

「……クソ」

ドアが内側から開いた。

白いシャツの男が立っていた。

五十手前に見える顔は穏やかで、柏木より頭半分背が高い。

まくった袖から出た腕は、机に向かって
るだけの男のものではなかった。

神代修一は笑ったまま、柏木の首から胸、
腹、短パンの裾から出た太腿へと目を降ろし
ていく。

「お待ちしていました、柏木さん。今日も遅
れましたね」

「すいません、信号全部引っかかって……神
代様、ご注文のお弁当です」

営業用の声を作り、柏木は保温バッグから
袋を出した。

神代は受け取らない。

肩越しに、部屋の奥を顎で示した。

「中のテーブルまで運んでください」

「いや、玄関渡しが決まりなんで」

「決まりより、私の評価のほうが、あなたの営業所には効くと思いますが」

声は柔らかい。

なのに、語尾だけが冷たい。

柏木は奥歯を噛み、袋を抱えて一步上がった。

「……靴、脱ぎますよ」

「どうぞ」

リビングは広く、壁一面の窓の向こうで湾が光っている。

テーブルに袋を置いた瞬間、背後で玄関のドアが閉まった。

カチャン。

振り向くと、神代がスマホの画面をこちらへ向けていた。

スマートロックのアプリに、「施錠」の文字が点いている。

「おい」

柏木は玄関へ戻り、ドアノブを回した。

動かない。

内側のつまみがあるはずの場所には、暗証番号のパネルが付いていた。

「開けろよ。次の配達あんだよ」

敬語が剥がれたのは、自分でも分かった。

神代は気にした様子もなく、廊下の壁にもたれている。

「今日は、お話があります。座らなくて結構です」

尻ポケットのスマホが震えた。

店長からの着信だった。

『柏木、今、神代様の部屋にいるな。GPSで見えてる』

店長の声は早口で、後ろで誰かの電話の声が重なっている。

『神代様から、お前の評価が星ひとつで入った。コメントは、態度が悪い、遅い、だ』

「ちょっ……待ってくださいよ、遅れたつつってもちょっとで」

柏木は玄関のドアに背中をつけた。

『言い訳すんな。神代様の評価が十日以内に五つに戻らなきゃ、お前との契約は切る。うちは大口を落とせないんだよ』

「十日って……店長、俺いま鍵かけられてんですよ」

『謝罪の件は神代様の言うとおりにしろ。証拠も撮って送れ。いいな』

通話が切れた。

続けてアプリが鳴り、画面に「遅延ペナルティ適用」の赤い帯が出た。

柏木はスマホを握りつぶしそうなほど握んだ。

「聞こえましたか」

神代が自分のスマホを差し出した。

配達アプリの評価画面に、星がひとつだけ点いている。

「……あんた、最初からこうするつもりだったろ」

「先週も遅れました。その前の週も。私はずっと待っていたんですよ、あなたを」

「弁当の話だろ、それ」

神代は笑ったまま、画面の星を柏木へ向けた。

「どちらも、です」

神代はソファに腰を下ろし、スマホを横に構えた。

レンズが、柏木の胸元を向く。

「謝罪の動画を撮ります。店長さんにも送る約束ですから」

「ここにかよ。カーテンも閉めねえで」

「両手を頭の後ろへ。足は肩幅より広く。背中のバッグは下ろさないでください」

柏木は拳を握ったまま動かなかった。

神代は画面の星を、指で軽く叩いた。

契約を切られたら、次の仕事の当てはない。

家賃の引き落としは来週だ。

柏木は歯を食いしばり、太い腕を後頭部へ回した。

ポロシャツが腋の下で引っ張られ、腹筋の段が布越しに浮く。

保温バッグの重みで、胸が前へ突き出た。

「いい体ですね。自転車だけで、ここまでな
りますか」

「……知るかよ」

録画の赤い点が灯った。

「では、遅れてすみませんでした、と」

「遅れて……すみません、でした」

「カメラを見て。営業所の名前と、あなたの
名前も入れてください」

レンズの赤い点が、額の汗まで映してい
る。

「……フードライダー港南営業所、柏木剛で
す。遅れて、すみませんでした」

声が掠れた。

神代は首を傾げた。

「顔が赤いですよ。恥ずかしいですか？」

「汗だよ。クーラー効いてねえんだよ、この部屋」

「涼しいくらいですよ。ほら、乳首が立っている」

柏木は思わず胸を見下ろした。

濡れた紺のポロシャツに、小さな突起が二つ浮いている。

「見んな」

「腕は下ろさないで。膝を少し曲げてください。荷物を持ち上げるときの格好です」

柏木は膝を曲げた。

太腿の筋が張り、短パンの裾が付け根のほうへずり上がる。

閉め切った部屋に、自分の汗の匂いが濃く溜まっていく。

神代はスマホをソファの背に立てかけ、レンズの向きを直してから立ち上がった。

「動かないでくださいね。映像がブレます」

正面に立たれると、柏木の目の高さに神代の顎がくる。

神代の掌が、ポロシャツの上から胸板を押した。

指が筋肉の谷をなぞり、乳首の上で止まる。

「ッ……」

「声、出ましたね」

「……うっせえ」

親指の腹が、布越しに乳首を潰した。

「ンッ……！」

膝ががくんと抜けかけた。

腕を下ろせば済む。

なのに、ソファの背のレンズが、柏木の頭から爪先までを映している。

神代のもう片方の手が、腰の後ろへ回った。

短パンのウエストのゴムを掴み、上へ引く。

股の布が、ケツの割れ目に食い込んだ。

「おい、何して……ッ」

「配達員さんの短パン、薄いんですね」

食い込んだ布の上から、中指がケツの谷を下へなぞる。

穴の真上で、指が止まった。

ぐっと押された。

「アッ……やめ、そこ、触んな……！」

「布一枚、ありますよ」

柏木は腰を前へ逃がした。

逃げた先に、神代の膝があった。

太腿の間に割り込んだ膝が、短パンの前を下から押し上げる。

そこで柏木は気づいた。

ちんこが、勃っている。

いつからだ。

短パンの中で硬くなったちんこが、神代の膝に潰されて、ビクンと跳ねた。

「……っ、ちが、これは」

「前、張ってますね」

神代は膝を引き、今度は掌で短パンの膨らみを包んだ。

「カメラに向かって、今どうなっているか教えてください」

「誰が言うか、変態」

「教えてくれないなら、この映像をこのまま店長さんに送ります。膨らんだ前ごと」

掌が、布の上からちんぽの形をなぞる。

竿の裏を親指で撫で上げられ、先のところで短パンがじわりと湿った。

「……ちんこ、が」

「ちんぽが？」

「……勃って、ます」

言った途端、神代の掌の中で、ちんこがまた跳ねた。

神代の喉が、低く鳴った。

「店長さんは、謝罪がちゃんと済むまで、あなたを好きにしていと言いました」

「嘘つけ……」

「さっきの電話、聞いたでしょう。言うとおりにしろ、と」

柏木は黙った。

黙った分だけ、腹の底が冷えた。

それでも、口が勝手に動いた。

「ふざけんなよ……遅れたつつってもちよつとだろ、信号だって全部赤だったし、この前だって雨でチェーン外れて、それでもちゃんと届けたじゃねえかよ、箸の向きも直したし、袋だって二重にしたし、なのに星ひとつってなんなんだよ、店長まであんな言い方しやがって、俺が何したつつうんだよ……！」

神代は最後まで黙って聞いていた。

聞き終えて、首から下がった名札を指で持ち上げた。

「長い言い訳でしたね。全部、録れています」

名札の写真の中で、制服の自分が歯を見せて笑っている。

神代は名札を離し、ポロシャツの一番上のボタンを外した。

二つ目も外れる。

柏木の汗で濡れた胸毛が、襟元からのぞいた。

「今日から十日。あなたの配達は、全部この部屋で終わってもらいます」

「……毎日かよ」

「星がひとつ戻るたびに、店長さんには写真を一枚だけ送ります。顔と下はぼかして。中身は、私が持っておきます」

神代が柏木の肩を押した。

膝が床に落ちた。

背中の保温バッグがずり下がり、肩の紐が首筋に食い込む。

目の前に、神代のスラックスがあった。

股の布が、盛り上がっている。

「顔を上げないで。そのまま、名札の文字を
読んでください」

短髪を掴まれ、鼻先をスラックスの前に押し
つけられた。

布の奥から、石鹼と、それとは別の雄の匂
いがする。

硬いものが、頬骨に当たった。

「……フードライダー、港南営業所……柏
木、剛……」

「その続きに、今日のお詫びを足して」

神代の手が、柏木の頬をスラックスに擦り
つける。

布越しに、神代のちんぽが脈を打っている
のが分かった。

柏木の短パンの中で、ちんこが痛いほど張る。

「……あんたの部屋で、これから、謝ります」

「『あんた』、ですか」

頭の上で、神代が笑った。

「それも録っておきます。受け取りのサインとしては、まだ薄いですが」

神代はスマホを取り、床に膝をついた柏木を真上から撮った。

レンズの向こうで、汗まみれの配達員が、客の股に顔を埋めている。

神代はソファに座り直し、脚を組んだ。

「立ってください、柏木さん。次は、脱いでもらいます」

第02話 「謝罪動画、一枚目」

「上から脱いでください。ボタンは、自分で」

神代はソファに座ったまま、スマホのレンズを柏木に向けていた。

柏木は床から立ち上がり、膝についた埃を払う暇もなく、背中中の保温バッグに手をかけた。

「……これ、下ろしていいか」

「どうぞ。ただし、見えるところに置いて」

肩の紐を抜くと、汗で貼りついていた背中に空気が当たった。

バッグを足元に置く。

神代はそれを見て、爪先で紐を踏んだ。

「制服は仕事の証拠です。名札も、外さないでください」

柏木はポロシャツの残ったボタンを外した。

裾を掴み、頭から抜く。

濡れた布が顔を擦って離れると、胸板と腹筋がリビングの白い照明を浴びた。

首から下げたストラップの名札だけが、素肌の胸の真ん中に垂れている。

脱いだポロシャツを丸めて胸を隠そうとした腕を、神代の声が止めた。

「隠さない。腕は横に」

「……クソが」

神代はスマホをスタンドに立て、横にタブレットを並べた。

リングライトが点く。

柏木の胸の汗の粒が、きらきら光った。

「今から、この文章を読んでももらいます。読み間違えたら、最初からです」

タブレットの画面に、謝罪文が表示されていた。

一行目を見ただけで、喉が詰まった。

「……これ、全部かよ」

「全部です。あなたの声で」

柏木は画面を睨み、息を吸った。

「『私、フードライダー港南営業所の配達員、柏木剛は、お客様への態度が悪かったことを認めます』」

「もっと胸を張って。名札がカメラに入るように」

肩を開くと、冷えた空気が乳首を撫でた。

乳首が縮み、名札のプラスチックの縁が当たって痛い。

「『遅配により、お客様に不快な思いをさせたことを、心からお詫びします』」

声が掠れたところで、神代が立ち上がった。

柏木の横に回り込み、左の乳首を指で弾いた。

「ヒッ……！」

「続けて」

「『今後は、お客様のご要望を……』 ツ、ア、おい……！」

神代の指が乳首をつまみ、ゆっくり引っ張った。

乳輪ごと伸ばされ、胸板の皮膚が突っ張る。

柏木の目が画面から外れた。

次の行が、どこだったか分からなくなる。

「『ご要望を最優先に、し、して……』」

「一行、飛びました」

神代は乳首を離さずに言った。

「最初からです」

「ふざけ……っ、あんたが触るからだろ……！」

「指一本で詰まるようでは、謝罪になりませんね」

神代は柏木の胸を押し、壁際まで下がらせた。

背中が冷たい壁紙に貼りつく。

神代はタブレットのスタンドを、柏木の目の高さへ動かした。

逃げ場が、壁とレンズの間だけになった。

「どうぞ。一行目から」

「……『私、フードライダー港南営業所の配達員、柏木剛は』……ンッ」

今度は右の乳首に、爪が立った。

先を潰すように押し込まれ、腰がビクンと跳ねる。

「『お客様への態度が、悪かったことを、認めます』……ッ、ア、ア……」

「いいですね。声が混ざるほうが、誠意に聞こえます」

神代は乳首を指の腹で転がしながら、もう片方の手で柏木の脇腹を撫で下ろした。

腹筋の段をなぞり、短パンのゴムの上で止まる。

柏木の短パンの前は、もう隠しようがないほど張っていた。

布の真ん中に、ちんこの先の形が浮き、そこだけ色が濃く濡れている。

「読むのをやめると、手を下へ入れますよ」

「……『遅配により、お客様に、不快な思いを』……」

神代が屈んだ。

濡れた舌が、左の乳首を下から舐め上げた。

「アッ……！　や、なに、舐め……っ」

「読んで」

唇が乳首を吸った。

ちゅ、と湿った音が、リングライトの熱の中で響く。

柏木は壁に後頭部を押しつけ、画面の文字を必死に追った。

「『心から、お詫び、します』……ン、ンッ……『今後は、お客様のご要望を最優先に、言うことを、聞きます』……」

神代の膝が、短パンの前に押し当てられた。

硬くなったちんこが布の中で潰され、先から溢れた汁が布をさらに濡らす。

膝がゆっくり上下するたびに、竿の裏が擦られる。

「アッ、ア、それ、やめ……膝、どけろ……」

「文章に、そんな行はありませんよ」

柏木の尻ポケットで、スマホが震えた。

神代は迷わずポケットに指を差し込み、スマホを抜き取った。

ついでのように、指先がケツの丸みを撫でていく。

画面を見て、神代は柏木の目の前に差し出した。

店長からのメッセージだった。

『神代様からまだ連絡がない。ちゃんと謝ってるか。怒らせたらクビだぞ』

続けて着信が入る。

神代はスピーカーにして、柏木の口元へ寄せた。

『柏木、聞いてるか。今どうなってる』

「店長、助けてください、俺いま——」

神代の親指が、赤いボタンを押した。

通話が切れた。

画面には、店長の名前と「クビだぞ」の一行が残っている。

「あなたの店は、あなたを守りませんよ」

神代はスマホをテーブルに伏せた。

「守るのは、私の評価だけです」

柏木は壁に背中をつけたまま、ずるずると膝を落としかけた。

腹の底から、言葉があふれた。

「なんなんだよ……俺、五年やってんだぞ、雨の日も台風の日も、店長が人足りねえって言うから休みの日だって出たじゃねえかよ、それがちょっと遅れたくらいでクビって、あの人俺の顔も見ねえで、客に頭下げろって、そればっか……なあ、俺ほんとに、そんな悪いことしたのかよ……」

神代は柏木の顎に指をかけ、顔をカメラへ向け直した。

「最後の段落が残っています」

画面の下の方に、まだ続きがあった。

「その前に、下も脱ぎましょうか」

「……っ」

「前がそんなに濡れていたら、謝罪の最中に何を考えていたか、見ている人に分かってしまいますから」

神代は短パンのゴムに指をかけ、一気に膝まで引き下ろした。

押さえつけられていたちんこが、弾かれたように跳ね上がった。

赤黒く張った先から、透明な汁が糸を引いて腹筋に落ちる。

太い竿に血管が浮き、胸の名札の真下で、ちんこが上下に揺れていた。

「隠さない。両手は壁に」

柏木は壁に掌をついた。

膝まで下ろされた短パンのせいで、足が開けない。

勃ったちんこだけが、レンズに向かって突き出ている。

「では、最後まで」

「……『この動画が、公開されても……文句は、言いません』」

『公開』と口にした瞬間、ちんこがビクンと跳ねた。

営業所のグループ、配達仲間、地元の連中の顔が、次々に浮かぶ。

その全員に見られるところを想像して、先からまた汁がこぼれた。

「最後の一行です」

「『神代様の……ご指導に、感謝します』」

「よくできました」

神代はスマホをスタンドから外し、柏木の足元にしゃがんだ。

レンズが、下から柏木のちんこを見上げる。

「受け取りのサインを、ください」

「……サイン？」

神代はレンズを、濡れた先に寄せた。

「ここで、自分で扱いて出してください。出たものが、あなたのサインです」

「できるか、そんなの……！」

「なら、今の動画を顔つきで店長さんに送ります」

柏木の手が、壁から離れた。

震える指で、自分のちんこを握る。

先走りでぬるぬるに濡れた竿は、握っただけで腰が浮くほど敏感になっていた。

「ゆっくり。カメラから外さないで」

手を動かす。

ぐちゅ、と音がした。

自分の手の音なのに、他人に聞かれていると思うと、耳まで熱くなる。

「ンッ、ア、ア……見んな、見んなよ……」

「乳首も、自分で」

空いた手で乳首をつまむと、さっき神代に舐められたところが痺れた。

ぐちゅ、ぐちゅ、と手の音が速くなる。

名札が胸の上で跳ね、汗が腹筋を伝って、濡れた陰毛に溜まっていく。

「アッ、ア、ア、ダメだ、これ、出る、出ちまう……！」

「床か、名札か。自分で選んでください」

「わか、んね……ア、アッ、イク、イク……ッ！」

腰が突き出た。

びゅるっ、と白いものが飛び、神代の足元の床に落ちた。

続けて飛んだものが、名札の写真にかかった。

残りは力なく垂れ、柏木の指を伝って床に糸を引いた。

「ハッ……ハ、ア……」

柏木は壁にもたれ、肩で息をした。

神代は床に落ちた精液ごと、スマホで撮り続けていた。

「一枚目、撮れました」

神代はタブレットを操作した。

アップロードのバーが右端まで伸びる。

保存先のフォルダ名に、柏木の名前と今日の日付が入っていた。

「私のクラウドです。店長さんには、これを送ります」

画面に出た写真は、顔と下半身がぼかしてあった。

名札を下げた裸の胸と、壁についた腕だけがはっきり写っている。

柏木は手を伸ばしかけて、やめた。

伸ばしたところで、もう神代の手の中にある。

神代はもう一つの画面を開き、柏木の評価の星を指で叩いた。

柏木のスマホが、テーブルの上で短く鳴った。

『評価が更新されました ★★☆☆☆ 神代修一様「誠意は伝わりました。続きに期待します」』

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01054794.html

奥付

作品名 ガチムチ配達員は星ひとつのクレームで配達先の部屋に閉じ込められ謝罪しながら犯され続ける

サークル タビューへ

発行日 2026・10・1

レーティング R18